

Title	<書評>Yukiyo KASAI, Abdurishid YAKUP and Desmond DURKIN-MEISTERERNST (eds.), : Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit (Silk Road Studies XVII). Turnhout : Brepols, 2013.
Author(s)	荻原, 裕敏
Citation	内陸アジア言語の研究. 32 p.151-p.170
Issue Date	2017-10-31
oa:version	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/67841">https://hdl.handle.net/11094/67841</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## = 書評 =

Yukiyo KASAI, Abdurishid YAKUP and Desmond DURKIN-MEISTERERNST (eds.), *Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische Maitrisimit* (Silk Road Studies XVII). Turnhout: Brepols, 2013.

荻原 裕 敏\*

## 1. はじめに

イギリス・ドイツ・フランス・ロシアなどの西欧列強が派遣した中央アジア探検隊及び日本の大谷探検隊によって 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて各国に齎された文書資料の中には、これまで知られていなかった言語で書かれたものが大量に含まれていたが、その中にはトゥルファン・ショルチュク（焉耆・カラシャール）・クチャ（亀茲・庫車）と言った所謂西域北道全域で発見されたものが含まれていた。この言語資料はサンスクリット写本の書写に使用されたブラーフミー文字を基礎としつつも、サンスクリット写本には用いられない文字を含むものであったため、サンスクリットからの借用語が認められる点はまもなく明らかになったが、言語構造の解明には数年の時間を要した。

各国に齎された資料の内、ドイツに齎された資料の解説・研究はトルコ語研究者の F. W. K. Müller 及びサンスクリット学者の E. Sieg が担当したが、1907 年に Müller はこの未知の言語を印欧語であると推定すると共に、インド語から Toxri 語に、さらにそこから翻訳されたとする奥書を含む *Maitrisimit* (以下、MS とする) というタイトルをもつウイグル語写本に注意を喚起した。翌 1908 年、E. Sieg 及び W. Siegling は問題の未知の言語による資料群の解説研究を公表したが、この言語の文法構造の概略を紹介した上で、印欧語の所謂 centum 語群に属する点を指摘した。また、この未知の言語を Müller によって指摘された MS の奥書に基づき、「トカラ語」と命名すると共に、この言語資料には 2 つの variant (現在はトカラ語 A 及びトカラ語 B と称される) が区別される点を述べている。その後、主にドイツ及びフランスの研究者を中心に解説・研究が行われた結果、トカラ語 B は亀茲国の、またトカラ語 A は焉耆国の言語であった事が明らかにされた。この言語で書かれた資料の殆どは部派仏教、特に(根本)説一切有部に属する仏典であるが、世俗文書や木簡・題記なども含む一方、極少数のマニ文字で書かれたマニ教文献が知られている。

上に記したように、トカラ語の解説の成果は 1908 年に Sieg 及び Siegling によって提出されたが、現在トカラ語文献学界では、この 1908 年を以てトカラ語研究創始の年と見做している。そして、トカラ語研究創始 100 周年を迎える 2008 年には、これを記念して、ドイツのベルリン=ブランデンブルク科学アカデミー・トゥルファン研究所によって、4 月 3-4 日にベルリンのアジア美術館で

\* OGIHARA Hirotooshi. 京都大学白眉センター特定准教授 (Associate Professor, Hakubi Project, Kyoto University)

記念学会が開催された<sup>(1)</sup>。本稿で紹介するのは、この記念学会の報告論文集である。一部の発表が収録されていないが<sup>(2)</sup>、基本的に本書はこの学会で行われた発表を基にしている。本書には 18 篇の論文が収められ、内容はトカラ語文献学及びウイグル語文献学だけでなく、印欧語比較言語学や仏教史など多岐に亘っており、評者の能力ではここに収録された論考の全てを正当に評価する事ができないため、本稿では各論文の論点をまとめた後、評者の専門であるトカラ語文献学の立場から、特に本書出版後に公刊された研究成果とも関連させつつ、コメントを与える。

## 2. 内容紹介

論文① Desmond Durkin-Meisterernst, “Entzifferung des Tocharischen: Aspekte einer Forschungsgeschichte” 「トカラ語の解読：研究史からの観点から」：本稿は本書の元となった学会の基調講演に基づいており、トカラ語研究の出発点となった Sieg & Siegling [1908] の学術史的意義を述べると共に、トカラ語研究の初期において議論の焦点となった「トカラ」名称問題について、トカラ語文献に自称として在証される *ārśi kǎntu* (トカラ語 A) 及び *k<sub>u</sub>caññe* (トカラ語 B) から、この言語がそれぞれアグニ語 (agnāisch) 及びクチャ語 (kuchäisch) と称される点に言及する。そして、ウイグル語 MS 写本の奥書に在証される *twqry* は *twryr* と読まれるべきであり、トカリストンではあり得ないとする Henning [1938] とウイグル語の *Daśakarmapathāvadānamālā* (以下, DKPAM とする) の奥書に基づき、中世ペルシャ語 *ch’r twryst’n* 「四 *twryr*」はビシュバリク (北庭)・高昌・カラシャール (焉耆) を含むが、クチャは *kūsān* として言及されるとし、「四 *twryr*」にクチャは含まれないと結論づけたペリオ説を紹介する。また、MS はトカラ語 A の *Maitreyasamitināṭaka* (以下, MSN とする) と比較研究が可能である事から、これら両文献の比較研究は中央アジア古代語文献研究において、(1)インド演劇及び敦煌変文との関係、(2)弥勒信仰の伝播及び(3)ウイグル仏教との関係並びにウイグル仏教成立に果たしたトカラ語仏典の役割の解明に対して重要な意義を有するとし、論文を締め括る。

【コメント】 p. 14：「トカラ」名称問題について、トカラ語文献に在証される「クチャの」を指す形式は *k<sub>u</sub>caññe* であり、サンスクリット・トカラ語 B のパイリンガルの語彙集であるロシア所蔵断片に見られる *k<sub>u</sub>caññe* をトカラの自称とする解釈は、現在トカラ語文献学では否定されている [Pinault 2002]。このように、トカラ語 A 及びトカラ語 B はその話者集団による自称に依拠した言語名を有する事となったが、この 2 つの言語の総称として妥当な言語名が存在しないため、トカラ語という名称を引き続いて使わざるを得ないのが現状である<sup>(3)</sup>。なお、MSN と MS との関

(1) 本学会の報告としては笠井 [2009] を、また本書に対する書評として慶 [2015] も参照されたい。なお、本学会で紹介されたドイツ所蔵の MS 断片のカタログ化の成果が, Laut & Wilkens [2017] として出版された。

(2) 実際の学会のプログラムは、<http://turfan.bbaw.de/bilder/aktuelles/maitrisimit-symposium-2008.pdf> で確認可能である。

(3) この状況は、トカラという名称が話者の歴史的な実態を反映するものではないという認識の上で、トカラ語仏典に反映される西域北道の仏教を「トカラ仏教」と称さざるを得ない理由ともなっている。本稿でも、

係を論じた Müller & Sieg [1916] も含めて, Sieg の業績の内のトカラ語に関するもののほぼ全てが, 2014 年に Pinault & Peyrot によってまとめられ, 閲読が容易になった。

p. 15: ウイグル語訳 DKPAM の奥書で, 原典の言語の名称として言及される *ugu kūsān* に対しては, Pinault [2013, pp. 348–351] がトカラ語 A からの語源を提出している。

論文② Jost Gippert “Die Bedeutung des Tocharischen für die Indogermanistik” 「印欧語比較言語学に対するトカラ語の意義」: Sieg & Siegling [1908] は当時未知の言語であった西域北道将来の言語に対して「トカラ語」という名称を与えると共に, 言語系統についてはそれまでに提示されていたチベット語などの可能性を否定し, 印欧語に属する点を証明したが, トカラ語は印欧語中のヨーロッパの言語と一致する特徴を示す点のみを指摘していた事から, (1) 所謂 centum 語群の特徴とは何か, (2) トカラ語と印欧語に属するヨーロッパの言語との多くの一致は何を意味するか, (3) 印欧語比較言語学におけるトカラ語の意義という 3 つの観点から, 印欧語におけるトカラ語の位置づけを再検討する。結論では, トカラ語は印欧祖語の古い特徴を保持する一方, 新しい言語特徴も示しており, 他の特定の印欧語との結びつきを示さないとする。

【コメント】 pp. 25–36: トカラ語についての言語学的研究の内, 本稿で言及されていないものをいくつか紹介しておく。トカラ語の歴史文法については, Pinault [2008, pp. 413–643] がある。また, トカラ語の動詞体系を扱った専著としては Malzahn [2010] を, トカラ語の接続法に関する体系的研究としては Peyrot [2013] を参照されたい。

論文③ Jens-Uwe Hartmann “Die Schulzugehörigkeit von *Maitreyasamitināṭaka* und *Maitrisimit*” 「*Maitreyasamitināṭaka* と *Maitrisimit* の部派帰属」: MSN と MS の部派帰属の再検討を目的としているが, 両文献中には部派帰属確定の根拠となり得る部分は見られない点を指摘, 特に三十二相のような概念が特定の部派の記述と一致している場合でも素材の部分的利用であり, また毘婆沙師 (Skt. *vaibhāṣika*-) に言及する奥書の記載は当該文献の訳者に関する記載に過ぎないため, 部派を確定する根拠たり得ないとする。その上で, MSN 及び MS には様々な資料から取られた要素が見られる事から, 特定の部派の教義を伝える事が目的ではないと考えられると共に, 先行研究の成果を参考に大乘仏教の要素の存在を指摘するが, これは大乘と所謂小乗の境界が薄れていた当時の中央アジア仏教の状況を反映しており, 傍証として中央アジアから発見されたサンスクリット写本 *Varṇārhavarṇa*, *Yogalehrbuch*, *Maitreyavyākaraṇa* を挙げる。最終的には, 部派帰属或いは大小乗の区別は, 当該文献の編者及び利用者にとって実用的な意味を持たないと結論づける。

【コメント】 p. 46: 大乘の特徴を示すサンスクリット文献として言及される *Varṇārhavarṇa* は, 先行研究が示すようにトカラ語断片にも数点知られているが, ドイツ所蔵のサンスクリット・トカラ語 A によるバイリンガルの小断片 2 点が, 新たに Itkin & Malyshev [2016] によってこの文献に比定された。

---

この前提の上でトカラ仏教という用語を使用する。ただし, 本書所収の一部の論文 [論文③⑤] では, クチャ出身者に対して無限定に「トカラ人 (Tocharer)」の用語を使用しており, このような使用は適切とは思われない。

論文④ **Dilara Israpil “The Old Uighur *Maitrisimit* Preserved in the Xinjiang Museum: A Study of Four Fragments of the Sängim Versions”** 「新疆博物館所蔵の古代ウイグル語 *Maitrisimit*：センギム本に属する四断片の研究」：新疆博物館所蔵の4点のMSの写本断片に関する研究であり、その内の一点の断片（60TS001:5-2）の片面は吉田 [1991, pp. 76–79] で出版されたものである。ここで発表された断片はいずれも1959年にセンギムで発見され、2つの異なる写本に属する。後者の写本に属する断片は葉数を欠くが、前者の断片の葉数はハミ本と一致する事が報告されている。

【コメント】本論文は中国語で出版された伊斯拉非爾 [2009] の英訳であるが<sup>(4)</sup>、中国語版には白黒の図版が附されており、参照されるべきである。また、Peyrot & Semet [2016] は、トカラ語A断片との比較によって、本論文で扱われた断片に対して新たな比定と解釈を与えており、今後はこちらを参照すべきである。

論文⑤ **Yukiyo Kasai “Der Ursprung des alttürkischen Maitreya-Kults”** 「古代ウイグル人の弥勒信仰の起源」：弥勒信仰には、死後に兜率天に生まれ変わり、弥勒の説法を聴く事を願う上生信仰と弥勒が地上に現れる際に共に人として生まれ変わり、説法を聴く事を願う下生信仰の二つの信仰形態が存在しているが、ウイグル仏教にはこの両者の信仰形態の存在が指摘されている。著者は、ウイグル語仏典の奥書や漢訳仏典・同時期の敦煌出土漢文史料等を利用し、ウイグル仏教における両者の信仰形態の来源について、ウイグルの下生信仰はトカラ語仏典に反映される西域北道の在地仏教に由来する一方、上生信仰は中国仏教、とりわけ敦煌で流行した唯識学派の影響によるものである事を指摘する。

【コメント】pp. 69–71：著者はウイグル語仏典の奥書の内、弥勒に言及するものを分析し、ウイグル仏教における弥勒信仰の実態を分析する。管見の限り、弥勒信仰に言及するトカラ語写本の奥書としては、ショルチュク発見のドイツ所蔵トカラ語断片 B605 の裏面に書かれた奥書を挙げる事ができる。この奥書は Thomas [1964, pp. 60–61] で読本として採用されたものであり、断片の表面とそれに先行する folio に書かれたブラーフミー文字を書写した功德によって弥勒に遭う事を願った記載が見られるが、これのみでは上生信仰か下生信仰かを判断する事はできない。なお、著者には本論文を発展させた論考として笠井 [2015] があるが、本論文投稿後に出版された本稿及び論文⑮⑯に関連する諸文献にも言及しており、併せて参照されたい。

論文⑥ **Victor H. Mair “*Maitrisimit* and the Narrative Traditions”** 「*Maitrisimit* と口唱文学の伝統」：敦煌変文との比較を通して、MSN 及び MS が中国口唱文学の成立に間接的影響を与えた点を指摘、また MSN に含まれる Skt. *nāṭaka-* ‘drama’ はより広い意味を有しており、文体的特徴から MSN 及び MS は劇ではなく、絵画を伴った変文のような口唱文学であったと推定する。なお、残された奥書の記載等から MSN が同名のサンスクリット原典から「翻訳」された事を想定する必要はなく、インド語で語られていた弥勒伝説に基づいて「編纂」された作品であり、『賢愚経』と同様の過程を経て成立した可能性を指摘している。

【コメント】トカラ語文献の転写方式として現在大部分の研究者が採用するものは TochSprR

<sup>(4)</sup> ただし、転写には若干の相違が確認される。

(B) I, II が採用したものであるが、本稿では Sieg & Siegling [1908] や Lévi [1932] 及び Filliozat [1948] と同様、Fremdzeichen の母音に下線を附した <a̲> ではなく <a> を使用し、例えば現在多くの研究者が <ta̲> と転写する文字に対して <ta> を与えている点に注意を要する。

p. 107, line 7: Toch.A *praveśakkār* は, *praveśakk ār* の誤植である。

p. 111: 英訳のみ引用されているトカラ語 A には出典が記されていないが, Ji [1998b, pp. 64–65] からの引用である。

p. 116: 壁画や変文に見える「処」及び「時」の用例から、著者はトカラ語やウイグル語を含む中央アジアの古代語による文献や美術にも類例が見られる可能性を指摘するが、Pinault [2000] はクチャ出土のトカラ語 B 文献や石窟壁画を利用して、この点を論じている。

論文⑦ **Melanie Malzahn “The Rebirth of Maitreya and an Encounter of Linguistics with Philology”** 「弥勒の転生及び言語学と文献学の邂逅」：トカラ語動詞 *tām-* ‘(G) to be born; (K) to beget, produce’ のトカラ語動詞体系全体における位置づけと当該の語根から派生したと見られる Toch.B *cmalye* の検討を主題とする。前半では、この動詞語根 *tām-* は孤立した存在ではなく、同様の言語特徴を示す語根を他にも少数指摘する事ができ、トカラ語動詞体系においてこれらの語根が小グループを形成する点を述べる。一方、既知の資料に 3 度在証される Toch.B *cmalye* はトカラ語 B の動詞形態論の観点からは明らかに不規則な語形であるが、この語形が在証される断片の内、文脈が把握され得る唯一の断片であるドイツ所蔵断片 B424 が弥勒に言及しており、この断片と MS との比較により、Toch.B *cmalye* が ‘of necessary (re)birth’ と「必要性」を指示すると解釈される事から、この語形は本来語根 *tām-* の現在語幹であった \**cāmā-* から派生した gerundive I の形式であり、新たに形成された現在語幹にとって代わられた後に語彙化した残存形であると結論づけている。

【コメント】 p. 130: 著者は Toch.B *cmalye* がトカラ語断片中に 3 度在証されるとするが、その後評者は、著者が言及していないフランス所蔵トカラ語 B 断片中の 2 点の文書にも、さらに 4 つの在証例を発見している [Ogihara 2015a, pp. 93–94]。

pp. 130–132: 著者はドイツ所蔵断片 B424 を解釈する際、兜率天よりの菩薩の降臨に言及する点に基づき、当該断片を弥勒に関連する断片と見做すが、仏典では釈尊も兜率天より降臨する菩薩とされる事から、この断片のパラレルとして MS を引用し、比較する方法は文献学的手法としては正確とは言えない。

p. 131: 著者は脚注 146 で THT3987 を business document として紹介しているが、この文書断片には business document から予想される社会経済文書・世俗文書のような文言は残存していない。

論文⑧ **Dieter Maue “Uigurisch <m’ytry> zu einem vernachlässigten lautlichen Problem”** 「ウイグル語の <m’ytry>: 見過ごされてきた音声上の問題」：サンスクリットよりウイグル語に借用された *maitreya-*, *maitrī-/maitrā-*, *maitreyasamiti* をバクトリア語・ソグド語・トカラ語などの中央アジア古代語文献中に在証される諸形式と比較し、ウイグル文字では同じく <m’ytry> と表記される「弥勒 (Skt. *maitreya-*)」と「慈悲 (Skt. *maitrī-/maitrā-*)」のウイグル語形式の来源を再検討する。中央ア

ジア古代語文献に在証される「弥勒」を表す語形や漢訳仏典に見られる音写は、仏教伝播の言語として想定される西北インド語（ガンダーラ語）の *\*/metraGa/* に由来し、ウイグル語の「弥勒」は、この西北インド語形式から借用されたソグド語 */mētrak/* に遡る */mētrē/* に来源し、恐らくはマニ教文献を介してウイグル語に *m'ytry /metre/* として借用されたとする一方、「慈悲」を表すウイグル語形式 */maytri/* は後にトカラ語或いはソグド語を介して借用されたと解釈する。また、ウイグル文字表記から *<m'ytrysmyt>* は */metresmit/* と読まれ、Toch.A *maitreyasamiti* の借用ではないと推定する。

【コメント】 p. 148 脚注 54： 著者は、トカラ語 B に 1 度だけ在証される *maitrāk* が、Toch.B *maitreye* の影響を受けた Toch.A *metrak* に基づく形式である可能性を指摘するが、ガンダーラ語の *\*/metraGa/* に由来する *\*metrāk* が Toch.B *mai(t)rā* 或いは Skt. *maitrī-* の影響を受けて成立した可能性も考慮すべきである。本論文において、著者は「慈悲」を表す語形から「弥勒」を表す語形への影響を考慮に入れていないが、漢訳仏典では「弥勒」という音写だけでなく「慈氏」という意識も使用される点から、このような可能性は十分にあり得る。なお、季羨林 [1998a] は、「弥勒」「慈氏」の漢訳仏典における用例を調べた上で、後漢頃から両者が使用され始めた点を指摘している<sup>(5)</sup>。

p. 149：トカラ語断片 A130a5 に在証される「四無量心」が引用されているが、この断片は A128 と同一の folio に属し、パーリ語仏典 *Makhādevasutta* (MN II: 76, II.3-23) に対応する記述が見られる。この 2 断片については、荻原 [forthc.] で検討を加える予定である。

論文⑨ Michaël Peyrot “Die tocharische *Daśakarmapathāvadānamālā*” 「トカラ語の *Daśakarmapathāvadānamālā*」：MS と並んで、トカラ語原典から翻訳されたとする奥書を有するウイグル語文献として DKPAM が知られているが、本稿はウイグル語 DKPAM に含まれる「六牙本生 (Skt. *Ṣaḍdantajāta*)」に対応する内容のテキストを有するトカラ語 A 断片群を検討し、この断片群をトカラ語の DKPAM と見做し得るかを論じる。トカラ語 A 断片中、この物語に比定される断片を含む写本はショルチュク発見のもの (A55-88) とセンギム発見 (A399-404) の二系統が知られている（前者をショルチュク写本、後者をセンギム写本と称している）。ウイグル語写本との比較の結果、ショルチュク写本は DKPAM の原典とは言えないが、センギム写本はその可能性を否定できないとし、また重要な点として、後者に属すると見られる小断片には *hatun* や *čor* と言ったウイグル語がブラーフミー文字で記されており、ウイグル文化との密接な関係を示す点を指摘する。

【コメント】 pp. 178-179：ウイグル語 DKPAM は、奥書によれば、トカラ語 B (*ugu kūsān tili*) に由来するトカラ語 A (*tugri tili*) 訳本から翻訳されたという。著者が本論文で扱っているのはトカラ語 A 写本だが、その後トカラ語 B 断片中にも DKPAM に収録された物語を含む断片が複数発見され、共同研究の成果が出版されている<sup>(6)</sup>。これらの研究によれば、ウイグル語訳とトカラ語 B 訳

(5) 季羨林は漢訳「慈氏」の来源について、Skt. *maitrī-*「慈悲」にトカラ語の接尾辞 *-k* を附した語形に由来するとし、この漢訳語をトカラ語に来源すると見做している。

(6) 本稿執筆時点で出版されているものとして、Peyrot & Wilkens [2014], Wilkens, Pinault & Peyrot [2014] 及

の間には確かに相互に一致する内容が確認されるが、文体等には相違も見られ、両者が完全に一致するとは認められないため、比定されたトカラ語 B 断片をウイグル語訳の原典と見做す事は困難であるとされている。この点については、次掲の⑩ Pinault 論文も参照。

論文⑩ Georges-Jean Pinault “*Contribution de Maitrisimit à l’interprétation de textes parallèles en tokharien*” 「*Maitrisimit* のトカラ語版の解釈への貢献」：MSN に比定されるトカラ語 A 断片の内、A269 + A290 及び A273 を MS と比較し、従来充分には解釈されていなかったこれらの断片に対して文献学的検討を行った上で、A273 に在証される語彙の内、ウイグル語との対応関係が明白な形式について対照表を与えている。A269 + A290 は、西域北道将来のサンスクリットによる根本説一切有部の阿含経『四衆経 (Skt. *Catuspariṣatsūtra*)』中に対応詩節を有する事から、サンスクリットトカラ語 A—ウイグル語との対照研究を可能にする。その結果、ウイグル語訳者がトカラ語 A 版を参照したと推定される点が指摘されると共に、サンスクリット版との相違から、トカラ語版の編者が根本説一切有部ではなく、説一切有部の原典を参照した可能性を示唆する。また、A273 についても、ウイグル語の訳語がトカラ語 A に拠っている点を指摘する。なお、著者は、MSN はインド語原典に基づいて「編纂」されたものであると見做しているが、類似した見解は前掲⑥ Mair 論文 [pp. 109–111] でも指摘されている。

【コメント】p. 185: 著者は MSN が弥勒下生について語る事のみを目的としたものではなく、仏教の教義を布教するために編纂されたものと見做し、その上で Skt. *nāṭaka*- ‘drama’ というタイトルを与えられている理由について、作品に威信を付与するためであった可能性を指摘するが、同様の見解は Pinault [2015b, 378; 2015c, p. 92] でも繰り返されている。

pp. 190–191: 著者は A269 + A290a1 を  $\bar{a}(r)k(i)\acute{s}(o)\acute{s}\acute{s}(is) \bar{t}\bar{a}p\bar{a}(r)k$  と推定するが、公開されている写真では母音部分を欠いた  $\acute{s}\acute{s}a$  と  $\bar{t}\bar{a}$  の間には  $\acute{s}a$  は書かれておらず、また  $\bar{t}\bar{a}$  には基字に附された長母音  $\bar{a}$  が確認され、 $\bar{st}\bar{a}$  と書かれていた可能性も否定されるため、単数属格  $\bar{a}(r)k(i)\acute{s}(o)\acute{s}\acute{s}(is)$  という推定はこのままでは成立し得ず、この推定を維持するならば書き誤りを想定する必要がある。一方、この箇所には書き誤りを想定せず、このままの読みを維持するのであれば、単数処格  $\bar{a}(r)k(i)\acute{s}(o)\acute{s}\acute{s}(am)$  が推定される。

p. 192 脚注 12: Toch.A *pākāccām* (Toch.B *pakaccām*) に対しては、慶 [2010, pp. 455–466; 2017b, pp. 222–228] が「三月請などの僧を招待する比較的長期の活動」とする新しい解釈を提示している。

p. 193: A269 + A290a6 の 2 行目 *šlyok* と (*caṣ trānkāṣ*) の間に typo が 2 語見られるが、この箇所は *stmorāṣ šlyok* である事が明白であり、この typo は削除されるべきである。

p. 195: A269 + A290b1 を (*ymas*)*su* とする著者の復元に従えば、 $\acute{s}su$  に対応する *akṣara* の前には  $\acute{y}ma$  の痕跡が確認されて然るべきであるが、 $\acute{s}su$  に相当する *akṣara* の直前には文字跡が一

---

び本誌本号掲載 Pinault, Peyrot & Wilkens “*Śāriputra and the Girl Reborn as a Dog: A Further Tocharian B Parallel to the Old Uyghur Daśakarmaphāvadānamālā*” を参照。また、ウイグル語訳の校訂本が Wilkens [2016] として出版され、同書 pp. 10–13 は印刷中の論文にも言及した上で、トカラ語とウイグル語訳の関係について論じている。なお、同じく DKPAM に属する物語に対応するトゥムシュク語断片の存在が以前より Dieter Maue によって指摘されていたが、これらの断片は Maue [2015] として出版された。



切見られない。また、現在確認される *akṣara* を <ssu> の下部と解釈するが、この *akṣara* は <ssu> の下部ではなく、<a> と読む方が妥当であると思われることから、(y<sup>ma</sup>s)su ka(r) という推定は成立し得ない。

p. 204: 著者は A269 + A290 でトカラ語 A に訳された詩節がサンスクリットと一致しない要因として、トカラ語 A の編者が利用した梵本が、現在我々に知られている根本説一切有部のものではなく、説一切有部のものであった可能性に言及するが、一つの部派の經典に対して複数の variant が存在していた可能性も考慮に入れるべきである<sup>(7)</sup>。

p. 213: A273a6–7 の (e)[p]r[e]raṃ は、<pa> の下部が欠落し、<ra> の部分が読み取れないため、(e)[p](r)[e]raṃ と転写すべきである。

p. 214: A273a7 の欠落部分に対して *gaṅgavāluk pṭāṇāktāśi ṣṇi tsarā papaikaṣ* を推定するが、末尾の *papaikaṣ* はトカラ語 B の語形であり、トカラ語 A としては *pāpekuṣ* が推定される。

pp. 219–222: 著者は、弥勒の幼少期における文字習得を扱った A273 に在証される Toch.A *akṣar-lame* の後分 *lame* ‘place’ を Skt. *bhūmi*- ‘earth, place, stage’ と関連づけ、大乘仏教的文脈で解釈される可能性を指摘しているが、この点については前掲⑤ Kasai 論文へのコメントで言及したトカラ語断片 B605 の奥書部分が注意に値する<sup>(8)</sup>。この奥書には弥勒との邂逅に対する願いとあわせて、「この技術 (= 文字) を学ぶものが、皆仏陀となりますように」という願いも書かれている。評者はこの文言が、著者の述べるような Skt. *bhūmi*- ‘earth, place, stage’ と関連づけられる *akṣar-lame* という表現を文字について使用する MSN の大乘仏教的思想と共通の背景を有していた可能性を指摘したい。

なお、著者にはサンスクリット仏典からの影響を前提に、MSN と MS を利用してトカラ語 A とウイグル語の統語論レベルでの比較を行った Pinault [2015a] がある。

論文⑪ Simone-Christiane Raschmann “Die Erforschung des Tocharischen und die alttürkische *Maitrisimit*: Ausgewählte Texte aus der Berliner Sammlung – eine Präsentation –” 「トカラ語研究と古代トルコ語 *Maitrisimit*: ベルリン・コレクション精選展」<sup>(9)</sup>: 本学会のために開かれたトカラ語及びウイグル語断片の特別展示の紹介であり、出陳された断片はベルリンのトゥルフアン・コレクションに所蔵される断片であり、本学会のテーマである MSN 及び MS の断片を中心とし、玉井達士氏の資金によって放射性炭素年代測定が行われたトカラ語断片 13 点やトカラ語 B 木簡及びマニ文字によるトカラ語 B 断片なども含まれる。なお、放射性炭素年代測定が為された 13 点 (Figs. 1–13) のトカラ語断片については測定結果も併せて紹介されており、論文⑩⑬⑭の図版をも兼ねている。

【コメント】 p. 239 (= 論文⑬ p. 312): THT333 は TochSprR(B) II, pp. 216–217 で転写が公表さ

(7) 荻原 [2014b] で扱った MSN に比定されている A256 所引の過去仏のリストは、根本説一切有部の律典『業事 (Skt. *Bhaiṣajyavastu*)』に対応箇所を有するが、漢訳・藏訳・トカラ語 A 訳で相違を示している。

(8) Peyrot [2008, p. 223] は、当該断片を比較の後期 (6–7 世紀) に属するものと推定している。また、このトカラ語 B で書かれた奥書には文法及び語形に誤りが散見される。

(9) 本稿は、J. P. Laut, G.-J. Pinault, L. Sander, Ch. Schaefer, H.-O. Feistel の共同作業の成果として提示されている。

れて以降、内容について正確な比定が提出される事はなかったが、本書で言及される Pinault による『十誦律』への比定は、評者の発見に由来する。評者は博士論文 [Ogihara 2009a] 執筆中の 2007 年に本断片と『十誦律』との対応を発見した。この点は 2008 年 8 月にモスクワで開かれたトカラ語研究百周年記念学会で報告しており、その報告内容及び本断片の修正テキストについては、Ogihara [2013a] を参照。

論文⑫ Klaus Röhrborn “Esoterische Interpretation von Erzähltexten in den zentralasiatischen Religionen” 「中央アジア宗教における物語テキストの秘儀的解釈」：先行研究によって指摘された「中央アジアのマニ教徒は、別の文化圏に属する物語を全く異なる文脈に用いて、教義を語る際の寓話として利用していた」という観点から、ドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A5a2–10a2 で語られている物語の再解釈を試みている。トカラ語 A の物語には対応するサンスクリット・漢訳・蔵訳には見られない仏教教義を述べた箇所が確認される事から、中央アジアの仏教徒もマニ教徒と同様に異なる文化圏に属する物語を寓話として利用し、仏教教義を説いていた点を論じた上で、マニ教・仏教にこのような事が可能であった背景として、中央アジアが布教の地であった点を指摘する。その際、素材となった物語は、布教のために派遣された集団が齎したものの或いは中央アジアを行き来する商人から伝え聞いた話であり、異なる文化圏に由来していた事から、中央アジアでは十分には知られておらず、このような改作が可能であったと結論づける。

【コメント】 pp. 274–275：著者は Thomas [1964, pp. 19–23] で読本として採用されたトカラ語 A の物語を、マニ教の寓話文学における構成を援用して解釈し、当該の物語は Skt. *anātman*-「無我」に関する教義と「錯覚」に関する教義の二つを含んでいると結論づけるが、読本として採用された物語は、5 人の王子が自らの持つ能力を互いに競い合い、最終的に功德を有する者の優位を語る事を主題とした物語の一部でしかない。当該の部分は容姿の優れた者と知恵を有する者との比較を扱った箇所であるが、物語全体の構成を考慮せず、一部のみを扱う分析手法は十分に成功しているとは言いがたい。

荻原 [2009b] で明らかにしたように、この物語には、対応するサンスクリット・漢訳・蔵訳には見られない『雑阿含経』の一部がトカラ語 A に訳されて引用されているため、他にも関連する他仏典からの引用を含んでいたと推定される。著者によって最初の教義と解釈された部分の内、51 行目の Skt. *anātman*-「無我」に関する言及はそのような他仏典からの引用と見做し得るが、物語の展開から主題が「無我」そのものであったとは考えにくく、物語に関連して引用された記述であったと見られる。一方、2 つ目の教義とされた 71 行目の内容について、著者は 51 行目に後続する 2 つ目の物語の内容と一致しない点を指摘した上で、「錯覚」に関する教義である可能性を指摘するが、この部分は読本として採用された部分の冒頭 31 行目「知恵を有する者は容姿の優れた者に勝る」という命題を繰り返したものであり、著者によって 2 つ目の物語とされた 51 行目に後続する物語をまとめたものではなく、本論文で検討された物語の結論に相当し、「錯覚」に関する教義という解釈は当たらない。

従って、著者が結論として提示する「中央アジアの仏教徒がマニ教徒と同様に、異なる文化圏

に属する物語を、教義を語る際の寓話として利用していた」とする考えは、本稿での議論からは受け入れがたいと言わざるを得ないが、ここに見られるような仏教教義に関する内容を有する他仏典からの引用が、比喩譚や本生譚の中で語られている事は事実であり、その限りでは著者の主張は否定されない<sup>(10)</sup>。なお、上述の『雑阿含經』のように、主題と関連する内容として引用されたと推定される他仏典からの引用については、荻原 [forthc.] でも論じられている。

論文⑬ Lore Sander “Was kann die Paläographie zur Datierung tocharischer Handschriften beitragen?” 「文字学はトカラ語写本の年代確定に対してどのように貢献し得るか」：西域北道将来のブラーフミー文字写本に字形の変遷を辿る事ができるかという点を論じ、論文⑯で放射性炭素年代測定に供された断片を文字学の観点から検討し（放射性炭素年代測定に供された断片は、論文⑪に測定結果と共に図版が掲載されている）、その整合性を検証する。クチャ出土のブラーフミー文字断片中、年代確定が可能なクチャ国王の名前が在証される断片は、漢籍との比較から 7 世紀前半から中頃に比定される。この点から、著者の分類の内、North Turkistan Brāhmī, Type a と称される字形は 618 年以前（恐らく 6 世紀末）には成立していたとされる。また、西域北道のブラーフミー文字断代のために <ka>, <ca>, <va>, <ṇā>, <ta>, <na>, <ma>, <ya>, <ga>, <śa> といった akṣara を選び、字形の変遷を検証した上で、North Turkistan Brāhmī, Type b では <ta>/<na>, <ca>/<va> の区別が殆ど見られなくなる点を指摘する。一方、Toch 601 (= THT4122) 写本の書体の検討に基づいて、トカラ語写本の上限年代はこれまで一般に受け入れられてきた 5 世紀よりもさらに古く、3-4 世紀に遡り得ることを指摘する [pp. 294-295]。以上のような枠組みの下、論文⑯で扱われた断片について文字学的検討を行った結果、上限年代に基づかなければという留保の下、放射性炭素年代測定の結果と基本的には一致するとされる。また、North Turkistan Brāhmī, Type a による断片は主にクチャ地域で、North Turkistan Brāhmī, Type a-b の過渡期的な特徴を示す断片はトゥムシユク・ショルチュク・センギム・ムルトウクを中心とし、North Turkistan Brāhmī, Type b を示す断片はトゥルフアン地域全域、とりわけ高昌で発見されるとする。

【コメント】 p. 283：クチャ王 Suvarṇaṣṭa, Tottika 及びその妻 Svayamprabhā に言及するキジルの題記は Sander [2015] で再検討されており、その内のキジル石窟第 69 窟のサンスクリット題記において Suvarṇaṣṭa と解釈されてきた箇所は誤読である事が明らかになった。

pp. 283-284：クチャ王の年代については、慶 [2013] が題記資料も含めて関連するほぼ全ての記載を検討しており、特に p. 284 に言及される 3 人のクチャ王は 8 世紀後半に在位していたと推定されている。

p. 289：著者は MIK 7592 (= THT4000) のブラーフミー文字を草書体 (kursiv) とするが、この木簡に書かれたブラーフミー文字は草書体と言うよりも、仏典書写に使用される字形に酷似しており、論文⑪図版 8 のような世俗文書に典型的に見られる草書体とは少なからず異なる点に留意する必要がある。

<sup>(10)</sup> トカラ語仏典には仏教教義が引用される事例が見られるが、このような引用が仏教教義を伝える有効な手段となっていた可能性については、Pinault [2015c, pp. 587b-588b] も言及している。

本論文では西域北道のブラーフミー文字について、クチャ出土の断片を中心に論じているが、近年同じくクチャ地域で発見されたカローシュティー文字資料の解読が進展しており<sup>(11)</sup>、この2つの文字がクチャ地域で併存していた時期の存在が明らかになりつつあり、またカローシュティー文字インド語による行政文書も発見されている。クチャ地域においてブラーフミー文字とカローシュティー文字がどのように併存していたのか、ブラーフミー文字とカローシュティー文字の相互関係といった点は、今後の検討を要する。

**論文⑭ Christiane Schaefer “Zur Katalogisierung der tocharischen Handschriften der Berliner Turfansammlung”**「ベルリンのトゥルフアン・コレクション中のトカラ語写本のカタログ化について」：本稿は、ベルリンのトゥルフアン・コレクション中に所蔵されるトカラ語写本のカタログ化を担当している著者による作業及び問題点に関する報告と、作業化の過程で発見した興味深い断片の紹介よりなる。ベルリン所蔵のトカラ語断片は4000点を超える事が知られているが、これらの資料は TocharSpr(B) I, II によって出版されたトカラ語 B 断片に対応する THT1-633, TocharSpr(A) 所収のトカラ語 A 断片である THT634-1101 並びに K. T. Schmidt が Habilitation thesis で研究した THT1102-1125 が既公表分に分類され、それ以降に未発表の断片が続く形で番号が与えられている。ただし、1つの番号には複数の断片が含まれている場合もあり、多いものでは1つの番号に約50断片が含まれ、番号は断片の総数には一致しない。また、トカラ語 A とトカラ語 B は区別されず番号が与えられているが、これは今後新しい断片が発見された場合を想定しての処理である。作業の結果、全既公表断片の約3分の1 (MSN に比定された65断片の内36点を含む) が紛失している事実が明らかになった。後半では、THT1241, 1306, 1308, 1322, 1331, 1335.frg.b, d, 1377, 1459, 1460, 1524 を紹介するが、THT1306, 1308, 1322, 1331, 1377 は MSN に比定される可能性があり、特に THT1331.frg.a は MS 第25章に対応箇所が見られる。

【コメント】本稿の後半ではドイツ所蔵のトカラ語断片から興味深い内容を有する未出版の断片を紹介しており、その際著者は自身の転写方式を採用すると断りを入れているが、論文には従来の転写方式との相違点が説明されておらず、やや困惑を覚える。サンスクリット写本の転写を見慣れている研究者には転写の多くがそれなりに理解され得る範囲内のものではあるが、pp. 335-336 で紹介されている THT1335 に現れる /<sup>o</sup>/ は評者には直ちに理解が及ばず、公表されている写真を確認し、初めて punctuation である事を知り得た。このようなトカラ語文献学では採用された事がないものについては、最低限の説明が欲しかったところである<sup>(12)</sup>。

pp. 331-336 :

THT1524 : 当該断片については、Peyrot [2010], 荻原 [2012, pp. 253-255] 及び Ogihara [2014a, pp. 108-109] も参照されたい。また、荻原 [2012, p. 255] は、裏面 SHT6731 が *Apannakasūtra* に

(11) この種の資料の解読に対して最も重要な一歩となったのは、Schmidt [2001] である。また、その後研究された資料については、慶 [2017a]などを参照。

(12) THT1335.frg.b.A2 及び B1 に在証される Fremdzeichen の <ka> は <ka> と転写されているが、その他の箇所の転写から <ka> の誤りであると考えられる。

比定される可能性を指摘している<sup>(13)</sup>。なお、著者はトカラ語 A の過去分詞 *kaknoṣ* が期待されるトカラ語 A の語形 *kaknuṣ* とは異なることから、トカラ語 B からの影響を指摘するが、トカラ語 A の過去分詞の別のタイプの変化からの影響も考慮すべきである。

THT1241: ドイツ所蔵断片以外のものも含めて、トカラ語による gloss を伴ったサンスクリット写本については、Peyrot [2014, 2015] が体系的な研究を行っている。

THT1460: 著者によって『波羅提木叉戒本 (Skt. *Prātimokṣasūtra*)』に比定されている断片は Ogihara [2009a] で扱ったものであるが、評者とは異なる解釈を与えている部分が散見される。以下、評者の解釈を挙げる<sup>(14)</sup>。

THT1460.frg.a: 著者が裏面とする面は、もう一方の面の内容から表面と判断される。この断片は尼薩耆波夜提 (Skt. *niḥsargika-pāṭayantika*-) 第 24–28 条に比定され、表面は第 24–26 条に相当すると見られる。また、本断片を戒本の注釈と見做しているが、サンスクリットとの対応から評者は戒本の条文のみを含むものと考えている。

Bb: /// (was)[t]sitse pitosa > (śwā)tsitse pitosa

Bc: /// .. ś[i]tya ma .. > (te)śit yama(śle)

Bd: /// +.. .. + nalle > /// – [pasta](rka)nalle

Be: § ā[y]eṃ > §[m]āyēṃ

THT1460.frg.f: 著者が裏面とする面は、もう一方の面の内容から表面に相当すると考えられる。この断片は波羅夷 (Skt. *pārājika*-) から僧伽婆尸沙 (Skt. *saṅghāvaśeṣa*-) を含む部分に比定されるが、対応条文を明らかにし得ない<sup>(15)</sup>。

Ba: kloy[o]n(t)ṛṇa > kloy[o]ṭar<sub>(V)</sub>

Bb: /// (śa)[m](ā)ne auṃ śa p[o] > /// [m](a)ne auṃ śap ·[o]<sup>(16)</sup>

Bc: /// śai traṅko > /// (pārā)śai traṅko

THT1460.frg.b-e: 評者の研究 [Ogihara 2009a] 及びその後の検討により、以下のように比定される。

(13) このサンスクリット面については、SHT XII, pp. 241–242 を参照。

(14) 本稿では、以下の転写方式を採用する。

[ ]: 破損によって読みが不確定な箇所	( ): 筆者によって推定された箇所
·: akṣara の欠けている子音若しくは母音	‡: 断片中の punctuation
{ }: 破損により推定された欠落部分	–: 断片の損傷により解読不能の akṣara

なお、煩雑さを避けるため、本稿では著者の行数指定を踏襲する。

(15) 著者は Bc に在証される *śai* を Skt. *śaikṣa dharma*- と解釈するが、戒本の構成及びこの語は Skt. *pārājika*- の異形態として在証される Skt. *pārājayika*- に由来する借用語 *pārāśai* と考えられることから、当該断片の表裏が確定される。

(16) ここに在証される *auṃ* が Skt. *hanyād* に対応するならば、この部分は波羅夷第 2 条に比定されることから、冒頭は *śamāne* ‘monk’ ではなく、現在中動分詞の語尾の可能性が高く、Skt. *grhītvā* に対応するものとして (*eṅkaske*)[m](a)ne を再建する事ができるかも知れない。なお、この注で言及した解釈は、Ogihara [2009a, p. 38 及び p. 184] で提示したものとは異なっている。

THT1460.frg.b = 尼薩耆波夜提第 25 条

THT1460.frg.d = 尼薩耆波夜提第 2 条或いは第 28 条

THT1460.frg.e = 裏面を */// (sañ)[ghā]* 4 と解釈する事ができるならば, 僧伽婆尸沙第 4 条の末尾に相当する.

THT1335: 以下の部分は修正の必要がある.

THT1335.frg.b

A1: */// (j + + ne > /// ne*

A5: */// (mad[dh.](i) > /// (ma)ddhi*

B1: *wiḱaṣṣam > wiḱaṣam*

B3: *tri ce dhyā > trice dhyā*

B6: */// + āśāyājñāyātane > /// – āśāyājñāyātamne*

THT1335.frg.d

B4: *nava prahar\ > nava prahar\ [ñu] ///*

B3: *adhi(m)ātrā ... .p.. > adhimātrā k[leś](a)[s]ṣ(e) [pra](hār) ///*

B4: *wi ḱaṣṣam > wiḱaṣam*

B5: */// + + [kle]śa[nma] ... .. /// > /// [kle]śa[s]ṣ[e pr](a)[hār wiḱa](ṣṣam) ///*

B6: */// + + + mṛtu [k]l[e](śanma) /// > /// mṛtuk\ kle[śa] ///*

pp. 336–345 : MSN に属する未出版の断片の内, 公開されている写真から, 著者とは異なる読みを提示できるものを以下に挙げる. なお, これらの断片は非常に状態が悪く, 読みを確定する事ができない場合もあり, 語レベルでの修正を要するもののみ言及する.

THT1331.frg. a

A5: *wri(na)ñā > wri[nā]ñā<sup>a</sup><sub>[V]</sub>*

A6: *ś[w]. lāṣi > ś[w](a)lāṣi*

THT1322.frg.b.Bb: *bodhisa[ttu] + + śr[a]va[k.]. > bodhisa[ttu] (vai)śr[a]va[m ḱa] ///*

THT1332.frg. d.Bb: */// + ... mtrā [ś]ika[ñ]<sup>a</sup> > /// – m trāñki[ñ](c)<sup>a</sup>*

THT1331.frg.a

B1: *tspork. ñca > tspok[i]ñc[ām]<sup>(17)</sup>*

B2: *empely .ā pa sutsām > empely(ā)m [klo]pasutsām*

THT1331.frg.b

A2: *[w]lā[rnu umpar > [t]pār nu umpar*

B5: */// .sk.n<sub>t</sub> > (pāl)[s]k[ā]n<sub>t</sub>*

THT1331.frg.c.B1: */// [t]kāpat..[ke] /// > [t]kā pat [nu kle] ///*

THT1377.frg.a.recto 4: *kārna[tma] + > kārna[na]<sup>(18)</sup> ///*

(17) この語形は Malzahn [2010, p. 1000] でも指摘されている.

(18) この語形は Malzahn [2010, p. 560] でも指摘されている. なお, ここで *[na]* と読んだ *akṣara* には *virāma*

THT1377.frg.b.verso 1: *lṭsq̣k po* > *lṭsq̣akyo*

THT1377.frg.d.B1: *waṣṭa ṣla* > *waṣṭaṣ la*

THT1377.frg.e.verso 2: *ṣalp[m]ām* > *ṣalp(m)ām*

THT1377.frg.g.A6: *ālaḳ\* > *ālaḳam*

THT1306

Ac: */// + kāsāṣsu mām.. + .. ///* > */// (ā)kāsāṣ sumām -- ///*

Bd: */// + + mañi laṃ\ > /// -- mañi lap̣\ [pl]· ///*

THT1308.frg.a

Az: *sā[nta] knā.. ///* > *sān[ṭa]k tā[ṣ]· ///*

B1: *[ka]kmu[ṣ].. sa ..ṣ\ > /// (ta)tmuṣ n(a)sa[m̄a]ṣ\*

B2: *+ ṣg..ytyōś...k.m.o.[o].. ///* > */// ṣg ‡ [k](a)ṣtyo [śurā]myo p[o] -- ///*

THT1308.frg.b

Ay: *wärpnā[t]. + + ///* > *wärpnā[m]· ///*

B2: */// [pt]āñḳaṭ ḳaṣṣi tā.. + /// [pt]āñḳaṭ ḳaṣṣinā[ṣ]· ///* or */// [pt]āñḳaṭ ḳaṣṣi nā[ṣ]· ///*

B3: */// ḳlyo m̄anṭ\ me.. + + ///* > */// ḳlyom̄anṭ\ me(tra)[k̄am] ///*

論文⑮ Ablet Semet “Geschichte des Uigurischen Maitreya-Glaubens” 「ウイグル人の弥勒信仰史」：主に『大唐大慈恩寺三蔵法師伝』を利用して、ウイグル仏教において弥勒信仰が唯識学派の影響によって大きく発展し、重要性を有するに至った点を明らかにすると共に、ドイツ所蔵断片中に発見された『成唯識論』のウイグル語訳断片の転写とドイツ語訳を紹介している。

論文⑯ Tatsushi Tamai “Digitalisierung und Paläographie der tocharischen Funde” 「トカラ語資料のデジタル化と文字学」：著者が博士論文のテーマとして従事してきたトカラ語資料のデジタル化と、それを利用したブラーフミー文字の分類を主題としている。著者の方法論は、トカラ語断片の文字学的分析に加え、著者の枠組みにおいて重要な位置を占める断片に対して放射性炭素年代測定を行い、断代の根拠とするというものである。ここに示された結果として、トカラ語断片は I-1~III-2 に分類されるが、トカラ語文献学で MQ(R) として知られる古い特徴を記すキジル発見の断片のみが I-1~2 に分類される。また、言語学的にはトカラ語 B の母音に関わるアクセント法則の欠如や /ej/ 及び /eu/ といった二重母音は、古い字形を示す断片にのみ確認される。一方、トカラ語 A 断片は II-2/3 に分類され、短い期間に限定された地域で書写されたと見做すと共に、トカラ語 A 断片がショルチュクで発見され、類似した文字特徴を示すことから、トカラ語 A は仏教布教のための人工的言語であった可能性を指摘する。

【コメント】本書に収録された論文は著者の議論に不可欠の図版等の資料を欠いており、本論文だけでは議論の全体像を理解する事ができず、Tamai [2011] として出版された博士論文を精読する必要がある。ただし、Tamai [2011] は扱われた問題が文字学だけでなく言語学にもわたり、これだけで 1 つの書評論文を必要とし、本書評の範囲を越えるため、ここでは本書に収録された論

文のみを対象とする。

pp. 372–373：著者は、トカラ語 A 文献は短い期間にショルチュクという限定された地域で書写されたとし、類似した文字特徴を示す事から、トカラ語 A は仏教布教のための人工的言語であった可能性を指摘し、トカラ語 A とトカラ語 B の関係は、仏教混淆梵語 (Buddhist Hybrid Sanskrit) とサンスクリット或いは仏教漢語と古典漢語に対応し得るとするが、周知のように、サンスクリットと古典漢語は書面語として規定された文語であり、長い書記伝統を有する。一方、仏教混淆梵語は本来口語であるプラークリットによる仏典が、サンスクリット化の過程でサンスクリットへ改められ、韻律からはプラークリットの特徴が確認されるが、正書法はサンスクリット化されたインド語を指す [Edgerton 1953, pp. 4b–6a]。また仏教漢語は、インド語仏典の翻訳のために、口語的要素や「世界」「為へ故」といった本来の漢語になかった要素を語彙や語法に含む漢語を指す [船山 2013, pp. 177–208]。この点から仏教混淆梵語は口語を、仏教漢語は漢語によるインド語の翻訳体を基底としており、両者の基底となっている言語層や実態は異なっている<sup>(19)</sup>。従って、前者のインド語の比喩によるならば、トカラ語 A は (トカラ語 B とは別に存在する) 口語に基づきながらも正書法の面でトカラ語 B へと改められた言語であり、また漢語の比喩を採るならば、トカラ語 B に基づいて口語的要素やインド語仏典翻訳のために新たに導入された語彙・語法を含んだ言語となる。著者によれば、トカラ語 A がこのいずれかの人工的言語であったとする見解は、トカラ語 A における二重母音の単母音化や語末母音の脱落或いは *-sk-* で形成される動詞の現在語幹の欠如によって裏付けられるとするが、トカラ語 B には見られないこれらの言語特徴は、共通トカラ語から分岐した後にトカラ語 A 内部で生じた言語変化として解釈され、いずれもトカラ語 A が上記のような人工的言語であるとする説を支持するものとは言えない<sup>(20)</sup>。

トカラ語 A がトカラ語 B とは異なる言語態であったとする見解は、トカラ語 A 文献には仏典しか見られないという資料上の偏りに基づくが、特にトカラ語 A の医術・呪術関係文書や 2 点の寺院会計文書の存在からは、トカラ語 A が仏典書写のみに使用された死語ではなく、口語として実用されたという説が有力になっている [Malzahn 2007, p. 290; Pinault 2007, p. 180, fn. 19] <sup>(21)</sup>。評者はさらにトカラ語 A で書かれた、恐らく公文書と見られる世俗文書の断片 1 点 (THT1519) を発見した事を契機として、その他のトカラ語 A 資料を再検討し、トカラ語 A はショルチュクの言語であり、ウイグル人が仏教に改宗する頃までに、トカラ語 B の影響の下に成立した仏教言語として威信を高めていた事から、トカラ語 B 話者やウイグル人に仏教言語として使用された可能性を

<sup>(19)</sup> 仏教混淆梵語及び仏教漢語が使用された時代はトカラ語 A よりも長く、また使用された地域も広いだけでなく、サンスクリット化或いは口語要素の度合い等によって様々な変種が存在しているため、この点では著者が用いているトカラ語 A の比喩としては不適である。

<sup>(20)</sup> 著者の見解に従えば、トカラ語 B はサンスクリット或いは古典漢語と比較されるが、これまでに発見されている世俗文書や木簡などから窺えるように、トカラ語 B は一般に口語としても実用されており、書面語として規定された文語としてのサンスクリットや古典漢語と比較され得るものではない。

<sup>(21)</sup> Peyrot [2010] はトカラ語 A の性格を再検討しているが、Malzahn によって指摘された 2 点の寺院文書の存在を考慮しておらず、トカラ語 A によって書かれた文献は、トカラ語 B 話者或いはウイグル人の手になるものであったとする。



指摘した [Ogihara 2014a].

なお、論文⑬⑭で扱われたトカラ語断片はドイツ所蔵断片の極一部であり<sup>(22)</sup>、その他のコレクションに含まれる断片が考慮されていない点は、西域北道で使用されたブラーフミー文字の変遷を跡付ける上では十分とは言えない。その他のコレクションとは異なり、ドイツ所蔵断片は発見場所に関する記述を得られる場合が少なくなく、地理的分布を考慮に入れた分析を行う際に重要な手がかりを提供する事は確かであるが、ここで検討対象とされたドイツ所蔵断片が当該地域で使用されたブラーフミー文字の類型を全て網羅しているとは考えにくく、ここで提示された結果がその他のコレクションにも適用され得るか、検証が必要である。特に、フランス所蔵断片の多くはクチャのドゥルドゥル=アクルの寺院跡から発見されており、キジル発見の断片との比較が期待される。

また、言語特徴からトカラ語 B には、古代期・古典期・後期または口語の 3 つの段階が区別される事を Peyrot [2008] は論じているが、この 3 つの分類とブラーフミー文字の字形の変遷が、どの程度まで一致するのかについて詳細な検討が必要である。字形の変遷と言語特徴との関係は論文⑯でも若干指摘されているだけでなく、Peyrot [2008, pp. 201–206] が文字特徴及び放射性炭素年代測定の結果と併せて比較を行っており、これらは概ね一致する点が述べられているが、荻原 [2013] で指摘したように、最も古いトカラ語 B の言語特徴を示すキジルの題記は、最も古いとされる字体では書かれていない。トカラ語文献学では、最も古い言語特徴を示す写本断片が新しい段階の特徴を示すブラーフミー文字で書写されている場合、この要因をより古い時代のテキストを後代にコピーしたものであると解釈しているが、このような見方が成立するのか、或いは論文⑬ [p. 285] に指摘されるようにブラーフミー文字の地域的変種や書写伝統の相違などと言った要因が介在し得るのか等についての検討が、今後の課題として残されている。

論文⑰ Jens Wilkens “Der „Neutag“ und die *Maitrisimit*: Probleme der zentralasiatischen Religionsgeschichte” 「“新日”と *Maitrisimit*：中央アジア宗教史の諸問題」：ウイグル語文献学において、「半月の初日（新月或いは満月）」に対応し、「新年の祭」を指示すると解釈されてきた *yaŋi kūn* について、ウイグル語文献に在証される用例の検証を通して再検討したものであり、検討の結果、ウイグル語 *yaŋi kūn* には「新年の祭」と言った意味はなく、普通名詞として「祭日・儀式」を指す一方、「奇跡」を指す用例も見られるとする。ただし、この語形の由来は仏教以前に遡り、インドではなく中央アジアに来源する概念の可能性を指摘する。

【コメント】 p. 386：ウイグル語 *yaŋi kūn* に対応する Toch.A *opšäly*, Toch.B *ekšalye* の語義と語源については、Pinault [2015b] が詳細な研究を行っており、本論文で提示された語義がトカラ語にも適用される点を論じている。

論文⑱ Peter Zieme “Ein alttürkische Maitreya-Hymnus und mögliche Parallelen” 「古代ウイグ

<sup>(22)</sup> 論文⑯の基となった Tamai [2011] はドイツ所蔵断片中の TochSprR(B) I, II で出版された断片のみを分析対象としており、Malzahn [2007] で最も古いと見做されている THT4122 及びこの断片と同じ写本に由来すると見られる断片群は検討されていない。

ル語の弥勒讃歌とそのパラレル」： *Insadi-Sūtra* のタイトルで知られているモンゴル時代のウイグル語文献は、上生信仰を反映する弥勒への讃歌を含む事が指摘されているが、本論文ではこの内の幾つかの讃歌に対して漢文仏典中に比定されたパラレルが紹介されると共に、一部の陀羅尼が敦煌出土の『上生礼』と一致する点が指摘されている。

### 3. まとめ

前節で紹介したように、本書に収録された諸論考は、ほぼ全て西域北道における弥勒信仰を主題としており、中央アジアの弥勒信仰について研究する上で重要な成果を提供している。本書を通読する事で、読者は中央アジアの弥勒信仰について多くの知見を得る事ができよう。特に、漢文史料をも視野に入れてウイグル人の弥勒信仰を論じた論文⑤⑬⑱は、トカラ語文献学を専門とする評者にとって、ウイグル仏教における弥勒信仰の背景及び展開について見通しを与えてくれるものであった。また、論文③⑥⑩は、トカラ語 A の MSN の思想的背景及び成書過程が内包する複雑な問題に光を当てている。これらを総合すると、ウイグル仏教はトカラ仏教から所謂弥勒下生信仰を受容する一方、敦煌を中心とする唯識学派の影響を被る形で上生信仰を受容し、この 2 つがモンゴル時代に至るまで継続・発展していったとすることができる。ただし、論文⑤が主に漢文史料を利用して後者の上生信仰の背景・展開を跡付けているが、トカラ仏教における弥勒信仰は本書所収の論文では扱われておらず、この点は今後検討が必要な課題と言える。

ただし、西域北道の弥勒信仰を扱う場合には、西域南道における弥勒信仰の状況も視野に入れなければならない。新疆地域の弥勒信仰について概観する上でも、論文⑥⑱で言及されている、コータン語『ザンバスタの書』第 22 章に語られる弥勒伝説を敦煌壁画も視野に入れて検討した Kumamoto [2009] の成果などが、今後の比較検討に供されるべきであろう<sup>(23)</sup>。また、文献資料以外に西域北道における仏教を考察する上で重要な資料として、キジルなどの石窟寺院に描かれていた仏教壁画が存在する。学会のテーマではなかったため、本書には仏教壁画の分析に関する研究は収められていないが、西域北道の仏教史を復元する上で欠かせない事は言うまでもない。宮治 [1992, pp. 453–467, 512–517] に代表されるように、美術史研究では、キジルの第一様式に属するヴォールト天井窟に描かれた図像が兜率天上の弥勒或いは弥勒出世を待つ大迦葉入定説話と関連づけられるだけでなく<sup>(24)</sup>、第二様式の中心柱窟と称される類型の石窟は主室前壁上部に兜率天上の弥勒が描かれており<sup>(25)</sup>、これがクチャにおける弥勒信仰を反映するものと解釈されている。

<sup>(23)</sup> この論文は 2002 年の国際シンポジウムの報告であり、若干の改訂を加えられた原稿が東京大学言語学研究室の Web サイトで閲覧可能である。

<sup>(24)</sup> 弥勒出世を待つ大迦葉入定説話を含むトカラ語 B 断片 2 点を扱った荻原 [2015b] に対するコメントとして、当該のトカラ語 B 断片が禅観と関連する可能性を山部能宜早稲田大学教授よりご指摘頂いた (2015 年 11 月 21 日)。仮にこの断片が禅観と関連するならば、ヴォールト天井窟に描かれた大迦葉入定説話とされる禅観僧の図像との関連が指摘される。

<sup>(25)</sup> 近年主室前壁上部の壁画を弥勒ではなく、仏陀とする解釈が任 [2008] によって提出されている。この解釈の妥当性を評者は判断し得ないが、この解釈が正しいとすれば、クチャ仏教における弥勒信仰の展開に

アジア全域に伝わり発展して行ったという歴史的経緯を有する弥勒信仰は、インドや西北インドにおける起源や発展について不明な点を残しており、非常に重要なテーマであるにも拘わらず、中央アジアにおける展開を跡付ける事が困難であった事もあり、十分に解明されているとは言えない。本稿で紹介した論文集には西域北道将来の仏教文献研究の最前線に立つ研究者の優れた論稿が収録されており、本書で扱われた領域の専門家は勿論の事、関連する分野の専門家、とりわけ本書では扱われていない仏教美術史の専門家にとっても、当該分野の研究情况及び課題として残されている問題点等の把握に役立つ事は言うまでもなく、また自らの関心に引き寄せて閲読する事で、新たな着想が得られるはずである。本書で提出された成果を踏まえ、本書に収録された領域だけでなく、関連諸分野の研究者も交えて、弥勒信仰が果たした歴史的・宗教史的役割の解明が進展する事を望んでやまない。

#### 略号表・参考文献目録（ABC 順）

- Ching Chao-jung 2010: *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. (Unpublished dissertation thesis, École Pratique des Hautes Études).
- 慶昭蓉 2013: 「亀兹石窟現存題記中の亀兹国王」『敦煌吐魯番研究』13, pp. 387–418.
- 慶昭蓉 2015: 「吐火羅語与『弥勒会见記』研究新猷」『西域文史』10, pp. 43–66.
- 慶昭蓉 2017a: (荻原裕敏訳)『『橋資料』中のクチャ・カロシュティー文字 (Kučā-Kharoṣṭhi) 木簡について』入澤崇・橋堂晃一 (編)『西域研究叢書 6 大谷探検隊収集西域古語文獻論叢: 仏教・マニ教・景教』京都: 龍谷大学仏教文化研究所西域研究会・龍谷大学世界仏教文化研究センター, pp. 31–43.
- 慶昭蓉 2017b: 『吐火羅語世俗文獻与古代亀兹文化』北京: 北京大学出版社.
- 迪拉娜・伊斯拉非爾 2009: 「新疆博物館藏勝金口『弥勒会见記』研究」張定京, 阿不都熱西提・亜庫甫編『突厥語文学研究: 耿世民教授 80 華誕紀念文集』北京: 中央民族大学出版社, pp. 81–97.
- Edgerton, F. 1953: *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. 2 vols. New Haven: Yale University Press.
- Filliozat, J. 1948: *Fragments de textes koutchéens de médecine et de magie. Texte, parallèles sanskrits et tibétains, traduction et glossaire*. Paris: Librairie d'Amérique et d'Orient Adrien-Maisonneuve.
- 船山徹 2013: 『仏典はどう漢訳されたのか: スートラが経典になるとき』東京: 岩波書店.
- Henning, W. B. 1938: Argi and the “Tocharians”. *Bulletin of the School of Oriental Studies* 9, pp. 545–571.
- Itkin, I. & M. Malyshev 2016: Three Unedited Sanskrit / Tocharian A Bilingual Texts of the *Varṇārhavarṇastotra*. *Manuscripta Orientalia* 22-2, pp. 3–8.
- 季羨林 1998a: 「梅呾利耶与弥勒」『季羨林文集』第十二卷「吐火羅文研究」南昌: 江西教育出版社, pp. 232–265.
- Ji Xianlin 1998b = *Fragments of the Tocharian A Maitreyasamiti-Nātaka of the Xinjiang Museum, China transliterated, translated and annotated by Ji Xianlin: in collaboration with Werner Winter, Georges-Jean Pinault*. New York: de Gruyter.
- 笠井幸代 2009: 「国際学会 トカラ語研究と古代トルコ語 *Maitrisimit*: トカラ語解読百周年を記念して」『東方学』117, pp. 212–216.
- 笠井幸代 2015: 「ウイグル仏教における弥勒信仰: その起源と発展への試論」『龍谷大学アジア仏教文化研究センター・2014 年度研究報告書』京都: 龍谷大学アジア仏教文化研究センター, pp. 181–200.
- Kumamoto H. 2009: The Maitreya-samiti and Khotanese. Paper read at the Symposium franco-japonais: Interactions et translations culturelles en Eurasie (Paris, December 12–13, 2002). [http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/hkum/pdf/Maitreya\\_Paris\\_unicode2.pdf](http://www.gengo.l.u-tokyo.ac.jp/hkum/pdf/Maitreya_Paris_unicode2.pdf)

- Laut, J. P. & J. Wilkens 2017: *Alttürkische Handschriften. Teil 3: Die Handschriftenfragmente der Maitrisimit aus Sängim und Murtuk in der Berliner Turfansammlung*. Stuttgart: Franz Steiner.
- Lévi, S. 1933: *Fragments de textes koutchéens (Udānavarga, Udānastotra, Udānālaṃkāra et Karmavibhaṅga) publiés et traduits avec un vocabulaire et une introduction sur le «Tokharien»*. Paris: Société Asiatique.
- Malzahn, M. 2007: The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In: M. Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, pp. 255–297.
- Malzahn, M. 2010: *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.
- Maue, D. 2015: Tumschukische Miszellen II: The Ḥamsasvara puzzle. In: M. Malzahn et al. (eds.), *Tocharian Texts in Context: International Conference on Tocharian Manuscripts and Silk Road Culture, June 25–29<sup>th</sup>, 2013*. Bremen: Hempen, pp. 117–126.
- 宮治昭 1992: 『涅槃と弥勒の図像学: インドから中央アジアへ』東京: 吉川弘文館.
- MN = *Majjhima-nikāya*. Pali Text Society.
- Müller, F. W. K. & E. Sieg 1916: Maitrisimit und „Tocharisch“. *Sitzungsberichte der Königlich preussischen Akademie der Wissenschaften, Jahrgang 1916-16*, pp. 395–417.
- Ogihara H. 2009a: *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B*. (Unpublished dissertation thesis, École Pratique des Hautes Études).
- 荻原裕敏 2009b: 「トカラ語 A «Punyavanta-Jātaka» に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言語学論集』28, pp. 133–171.
- 荻原裕敏 2012: 「吐火羅 A 語文献中の歴史資料」新疆吐魯番学研究院 (編) 『語言背後の歴史: 西域古典語言学高峰論壇論文集』上海: 上海古籍出版社, pp. 253–262.
- 荻原裕敏 2013a: Tocharian Fragment THT333 In the Berlin Collection. 『東京大学言語学論集』33, pp. 205–217.
- 荻原裕敏 2013b: 「略論龜茲石窟現存古代期龜茲語題記」『敦煌吐魯番研究』13, pp. 371–386.
- Ogihara H. 2014a: Fragments of Secular Documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15, pp. 103–129.
- 荻原裕敏 2014b: 「吐火羅語文献所見仏名系列: 以出土仏典与庫木吐喇窟群区第 34 窟榜題為例」『西域文史』9, pp. 33–49.
- Ogihara H. 2015a: Kuchean Secular Documents in the Pelliot Koutchéen Nouvelle Série. *Tocharian and Indo-European Studies* 16, pp. 81–105.
- 荻原裕敏 2015b: 「ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1859–1860 について」『東京大学言語学論集』36, pp. 103–129.
- 荻原裕敏 forthc.: 「トカラ語 A «Saundaranandacaritanātaka» における «Mahādevasūtra» の引用について」『東京大学言語学論集』38.
- Peyrot, M. 2008: *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Peyrot, M. 2010: Proto-Tocharian Syntax and the Status of Tocharian A. *The Journal of Indo-European Studies* 38, pp. 132–146.
- Peyrot, M. 2013: *The Tocharian subjunctive: a study in syntax and verbal stem formation*. Leiden: Brill.
- Peyrot, M. 2014: Notes on Tocharian glosses and colophons in Sanskrit manuscripts I. *Tocharian and Indo-European Studies* 15, pp. 131–179.
- Peyrot, M. 2015: Notes on Tocharian glosses and colophons in Sanskrit manuscripts II. *Tocharian and Indo-European Studies* 16, pp. 107–130.
- Peyrot, M. & A. Semet 2016: A Comparative Study of the Beginning of the 11<sup>th</sup> Act of the Tocharian A *Maitreyasamiti-nātaka* and the Old Uyghur *Maitrisimit*. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 69-4, pp. 355–378.
- Peyrot M. & J. Wilkens 2014: Two Tocharian B Fragments Parallel to the *Hariścandra-avadāna* of the Old Uyghur *Daśakarmapathāvadānamālā*. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae* 67-3, pp. 319–335.

- Pinault, G.-J. 2000: Narration dramatisée et narration en peinture dans la région de Koutcha. In: M. Cohen, J.-P. Drège & J. Giès (eds.), *La Sérinde, terre d'échanges. XIV<sup>e</sup> Rencontres de l'École de Louvre, 13-15 février 1996*, Paris: La Documentation française, pp. 149–167.
- Pinault, G.-J. 2002: Toch. B *k<sub>u</sub>caññe*, A *k<sub>u</sub>cim* et skr. *Tokharica*. *Indo-Iranian Journal* 45, pp. 311–345.
- Pinault, G.-J. 2007: Concordance des manuscrits tokhariens du fonds Pelliot. In: M. Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*, Heidelberg: Winter, pp. 163–219.
- Pinault, G.-J. 2008: *Chrestomathie tokharienne: textes et grammaire*. Leuven: Peeters.
- Pinault, G.-J. 2013: Paul Pelliot et les langues d'Asie centrale. In: J.-P. Drège & M. Zink (eds.), *Paul Pelliot: de l'histoire à la légende: Colloque international organisé par Jean-Pierre Drège, Georges-Jean Pinault, Cristina Scherrer-Schaub et Pierre-Etienne Will (Paris, Collège de France et AIBL, 2–3 octobre 2008)*, Paris: Académie des Inscriptions et Belles-Lettres, pp. 335–370.
- Pinault, G.-J. 2015a: Buddhist Stylistics in Central Asia. *Lingvarum Varietas. An International Journal* 4, pp. 89–107.
- Pinault, G.-J. 2015b: The Tocharian background of Old Turkic *yaŋi kūn*. In: E. Ragagnin, J. Wilkens & G. Şilfeler (eds.), *Kutadgu Nom Bitig: Festschrift für Jens Peter Laut zum 60. Geburtstag*, Wiesbaden: Harrassowitz, pp. 377–405.
- Pinault, G.-J. 2015c: Dramatic Works: Central Asia. In: J. Silk (ed.), *Brill's Encyclopedia of Buddhism*, Volume 1: *Literature and Languages*, Leiden: Brill, pp. 584–590.
- 任子平 2008: 「説一切有部の弥勒観」『西域研究』2008-2, pp. 104–115.
- Sander, L. 2015: Tocharian Donors in Kizil Caves and “Monks’ Poetry”: Some Reflections on Donors, Donations and Ceremonies. In: M. Malzahn et al. (eds.), *Tocharian Texts in Context: International Conference on Tocharian Manuscripts and Silk Road Culture, June 25–29<sup>th</sup>, 2013*, Bremen: Hempen, pp. 227–245.
- Schmidt, K. T. 2001: Entzifferung verschollener Schriften und Sprachen dargestellt am Beispiel der Kučā-Präkritis. *Göttinger Beiträge zur Asienforschung* 1, pp. 7–27.
- SHT XII = K. Wille (ed.) *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*, Teil 12. Stuttgart: Franz Steiner, 2017.
- Sieg, E. 2014: *Tocharologica: Selected Writings on Tocharian Edited and Introduced by Georges-Jean Pinault und Michaël Peyrot*. Bremen: Hempen.
- Sieg, E. & W. Siegling 1908: Tocharisch, die Sprache der Indoskythen: vorläufige Bemerkungen über eine bisher unbekannte indogermanische Literatursprache. *Sitzungsberichte der Königlich preussischen Akademie der Wissenschaften, Jahrgang 1908*, pp. 915–934.
- Tamai T. 2011: *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.
- Thomas, W. 1964: *Tocharisches Elementarbuch*, Band II: *Texte und Glossar*. Heidelberg: Winter.
- TochSprR(A) = E. Sieg, & W. Siegling (1921) *Tocharische Sprachreste. I. Band: Die Texte, A. Transkription, B. Tafeln*. Berlin/Leipzig: de Gruyter.
- TochSprR(B) I = E. Sieg, & W. Siegling 1949: *Tocharische Sprachreste. Sprache B*, Heft 1: *Die Udānāṅkāra-Fragmente: [I] Text, [II] Übersetzung und Glossar*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- TochSprR(B) II = E. Sieg, & W. Siegling 1953: *Tocharische Sprachreste. Sprache B*, Heft 2: *Fragment Nr. 71–633: Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Wilkens, J. 2016: *Buddhistische Erzählungen aus dem alten Zentralasien: Edition der altuigurischen Daśakarmapathāvadānamālā*. 3 vols. Turnhout: Brepols.
- Wilkens J., G.-J. Pinault & M. Peyrot 2014: A Tocharian B Parallel to the Legend of Kalmāṣapāda and Sutasoma of the Old Uyghur *Daśakarmapathāvadānamālā*. *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, 67-1, pp. 1–18.
- 吉田豊 1991: 「新疆维吾尔自治区新出ソグド語資料」『内陸アジア言語の研究』6, pp. 57–83.

**追記** 本書出版直後、評者は本稿の執筆をお引き受けしたにも拘わらず、評者の都合で執筆が大幅に遅延してしまった。本書の編集者の方々始め関係各位に、深くお詫び申し上げる。  
なお、本稿は JSPS 科研費 JP17K02724 による研究成果である。